

◇ 農薬のおそろしさ

金肥にかわって登場してきたのが化学肥料です。それは単に肥料としての役目だけでなく、殺虫に殺菌にも役立つ工夫がされ、除草剤としての農業薬品もできました。これらが省力農業、三ちゃん農業といわれる農家の労働力不足とあいまって爆発的伸長をとげることとなったのです。

昭和四十年の農薬生産額は五百億円といわれ、殺虫剤が五〇％、殺菌剤が二八％、除草剤が二〇％、その他が二％となつています。そのなかで、有機りん剤は全体の二一・五％をしめています。有機りん剤といえば、いままでもなく有名なパラチオン、テップ、E P N、メタシトックス、最近、低毒性といわれるものではマラソン、バイジット、スミチオンなどがあります。

つぎに、殺虫剤の中の有機物では塩素剤が一六、五％をしめています。それから、急性中毒は大したことはないが、慢性中毒が恐ろしいという意味で問題の水銀があります。世界でこんなに散いているところはないという水銀は殺菌剤の中の有機水銀剤が一、三％になつてい

ます。さらに最近非常にふえてきたという有機除草剤が一八、五％となつています。P O P というのは除草剤ですが、ベトナム戦争で枯葉作戦に使われたとして有名になりました。また、B H C は有機塩素で発ガン性があることが認められています。ブラエスは抗生物質で、目をやられるというので有名ですが、肺炎をおこすことが証明されています。

さて、そこで年次別に農薬事故数をみると、これは昭和三十五年から四十年までですが、昭和四十年には間違つて使つて死んだのが二十二名、散布中に死んだと明らかに認定されたものが全国で十一名、それから間違つて用いて中毒を起した者が十五名、散布中に中毒を起したとはつきり認定されたものが百五名です。これは官庁統計ですので、ある意味では、これらの数字は氷山の一角であると考えてよいと思います。私ども、現場にいるものにとつては物足りない数字です。

自殺は仕方ないといいますが、自殺例の未遂が百七例既遂が七百七十五名。死ぬのは勝手だといいますが、毎年七百名から八百名が、農家のかあちゃん、お嫁さん、